聖書の中で子どもがどう理解されているかというテーマを神学校で見つけました

聞き手
関川泰寛
教授

日本基督教団 安行教会

田中かおる 牧師（たなか かおる）

東洋英和女学院短期大学保育科、同専攻科（保育）卒業後、東京神学大学大学院を修了。安行教会牧師として奉仕するとともに青山学院中等部、浦和ルーテル学院、聖学院大学、東洋英和女学院大学、立教女学院短期大学、藤女子大学で、非常勤講師を勤める。

関川：田中先生の献身のきっかけをまずお話しくださいますか。

田中：献身のきっかけは、保育所保育士として働いているときに、壁にぶちあたったことです。保育の現場で、カリキュラムを考えていた時に、クリスマスをカリキュラムに入れるべきかで議論になりました。わたしは、入れるべきだと主張したのですが、異なる意見の人に、きちっと説得する言葉を持たなかったことに気づきました。そこで、キリスト教についてきちんと学ばねばと考えたのがきっかけです。

関川：ということは、田中先生の献身は、まずキリスト教を学んでみたいというところから始まったのですね。

田中：いいえ、そのとき、実は教団のCコースを受験して、すでに牧師となる道を歩み始めていたのです。しかし、自分ひとりで学んだだけではだめで、やはり神学校に入って、神学の学び舎に身を置きたいと考えるようになったということです。

神学校生活で得たもの

関川：なるほど。すでに召命を与えられていたけれど、神学校で多くの学生と一緒に学んでみたいと願ったわけですね。

田中：そうなんです。わたしは、学部の2年生に編入しましたが、学びそのものは、山あり谷ありで、大変でした。でもその都度同級生と先生方に助けられました。

関川：具体的には？

田中：わたしは、入学してから結婚し、出産したので、一度休学せざるを得なくなりました。子育てしながらの神学校生活でした。学部と大学院と合計8年在学することになりました。しかし、そこで、たくさんの友人たちを与えられ、それが今財産になっています。先生方も、あきらめないで頑張るように励ましてくださいました。

神学の学び

関川：神学大学では、何を専攻されましたか。

田中：新約聖書学です。修士論文では、聖書の中で子どもがどう理解されているかをテーマにしました。それは生涯の探究のテーマにもなっています。

関川：生涯のテーマを神学校で見つけたということですね。

田中：そういうことになりますね。わたしは、マルコによる福音書10章13節以下で、イエスさまが子どもを招き、「神の国はこのような者たちのものである」と語られましたが、それを解釈するとともに、日本のキリスト教の歴史の中で、この聖書箇所が、幼児の教育にどのような影響を与えてきたかを学びました。今、わたしは、キリスト教保育という講義を大学で担当していますし、幼稚園の理事やキリスト教学校の評議員などもしていますが、いずれも、聖書が子どもについて、子どもの教育について何を語っているかを考察したことが原点になっています。

関川：教会だけでなく、教育に関わる生活は、お忙しそうですね。

田中：ええ、でも、忙しくても楽しいものです。授業を担当した生徒・学生との関係は、時として卒業後も続きます。手紙をくれたり、教会に来てくれたりもします。そういう過去から現在、未来に続く関係の構築というすばらしい経験を伝道者はすることができます。

神学校生活って、決して堅苦しいものでも陰鬱なものでもない とにかく「楽しかった！」

聞き手
小泉 健
准教授

日本基督教団 堺教会

内田 知 牧師（うちだ さとる）

高校卒業後、すぐに東京神学大学に入学。1996年に大学院を修了後、日本基督教団堺教会の伝道師に就任。1998年冬、牧師按手。伊東教会牧師などを経て、2013年から現任地へ。

小泉：どのようにして牧師になる志を与えられたのですか。

内田：父が牧師で、子どもの頃は牧師にだけはなりたくなかったんです。父は子どもが牧師になることを願っていましたが、正直、反発心しかありませんでした。でも将来何になるかを考えた時、結局牧師の姿が浮かんできたんです。両親が喜んで、いつも生き生きと教会に仕えていたからでしょうね。

小泉：いったん普通の大学に行くことは考えなかったのですか。

内田：それも考えましたよ。でも逃げ道を作りたくなかった。この道を進むのなら潔く退路を断ち、牧師以外つぶしのきかない人間にならなければ、となぜか思ってしまったんです。

小泉：実際に入学してみてどうでしたか。

内田：ぼくにとっては寮生活をしたのが大きかったですね。「東神大生活＝寮生活」と言ってもいいぐらい。寮生活がなかったらムリだったかもしれない。実際、朝起こしてもらうこともありましたし。いろんな人と出会って、教えられました。

小泉：変わった人もいたのでは。

内田：そうだったかな……。東京神学大学の学生は年齢もまちまちで、いろいろな経験をしてきているでしょ？　そんな先輩や学友に支えられ、励まされ、時には戒められ…、そういう交わりの中で育てられるんですよ。お風呂でもたくさんの話をしました。

小泉：反対につらかったことは何ですか。

内田：なんでしょうね……。もちろん勉強もありますからしんどいこともありましたが、でも学生時代を振り返ると、まず頭に浮かぶのは、とにかく「楽しかった！」ということなんですよね。先生方もやさしく、先輩たちにも可愛がってもらって、楽しい学生生活でした。神学校生活って、決して堅苦しいものでも陰鬱なものでもありませんでしたよ。

忘れられない言葉

小泉：東京神学大学を修了し、いよいよ牧師になる時は、どんな気持ちでしたか。

内田：それがね、さほど不安はなかったんです。どんな田舎に遣わされても、そこに教会があるのだから最後は大丈夫、と思っていました。神の家族としての親しい交わりがあるんですから。

小泉：父上のように、教会に仕えるのはうれしいと。

内田：忘れられない言葉があるんです。教会員のおばあちゃんが、「先生の家族は幸せになってくれないと困る。だからそのために毎日祈っている」と言ってくれたんです。この人のために、この教会のために、どんなことでもしたい！って思いますよね。牧師になって本当に幸せだと思っています。

若い人たちへ

小泉：高校を出てすぐに東京神学大学を目差す人はとても少ないんですが、そんな人へのアドバイスはありますか。

内田：若い時に献身するのはかわいそう、と見られることもあるんですよね。だけど「このためなら命をかけても惜しくない」というものに若い時から打ち込める、これほど幸いなことはありません。

小泉：生涯をかけて取り組むわざだということですね。

内田：牧師の大切な務めの一つは説教をすることですが、父が65歳くらいになって、「ようやく説教にある程度納得できるようになった」と言っていました。ぼくも説教をする者として、本当にそうだと思うんです。生涯をかけて成長していくんですよね。